

白山 赤兎山～三ノ峰

田村他

【日時】 2007年12月29日（土）～2008年1月3日（木）

【メンバー】 L田村、山川、大野、浅井

白山周辺での厳冬期の縦走は、以前からの目標であったが、ずっと計画倒れが続いていた。しかし今年は、越後組の巻機シリーズが一応の区切りを見せて、メンバーが集められそうだ。白山フリークの山川さんが中心となり、実はとっても白山大好き人間の**大野さん**も加わってくれた。さらに年末の新しい顔として浅井さんも加わり、実に頼もしく楽しいメンバーが揃った。

今回の目玉はスノーシュー。トマで本格的に使われたことはなかったのではないかと。このルートではきっと威力を発揮してくれるだろうと、みんなお揃いのMSRを購入して臨んだ。

岩菅山の予備山行をこなし、いよいよ本番となったが、天気予報は大荒れの天気図を示していた。

28日晩、新宿から勝山行きのバスに乗る。雨はザンザカ降っている。

12月29日 雨

勝山のショッピングセンター前が、高速バスの終点だ。途中の渋滞で1時間遅れたら、予約のタクシーは帰ってしまっていた。雨は相変わらず本降りなので、とりあえずお店の軒下で出発の準備を始めた。

最初それを見たとき、私にはボンドの固まりにしか見えなかった。一瞬視界に入ったものの、深く考えずにパッキングをする。広げた荷物をザックにしまった時、異変に気づいた。「く、臭い・・・」（これは、アレのおいだ。でも、どこから・・・？ま、まさか・・・！）恐る恐るザックに詰め込んだばかりのスーパーの袋を見ると、さっきの「ボンド」がベッタリ！ザックにもついている！発狂しそうだったが、とにかく被害がこれ以上広がらないよう慎重に処理した。

そんなわけで出発に手間取ったが、タクシーを呼び直して小原の集落まで。予想に反して道には全く雪がなかった。雨の出発は気が重い、林道で距離を稼げるのはありがたい。雪がヘンについていたら雪崩を心配すべきところも、問題なく行けた。奥まで行くと次第に雪が出てきたが、非常に少ない。予定していたショートカットルートは藪だらけで、却ってドツボりそう。結局、林道を最後まで忠実に詰め、小原峠経由で行くことにした。登山道に入ると、微妙な沢や尾根が入り組んでいて、思ったより歩きづらい。小



原峠の手前に平らな場所があったので、そこに泊まることとした。テン場までずっと雨で、みんな完全にびしょぬれになってしまった。明日からは冬型となり気温が下がるとのこと。第一の関門である赤兎山を無事越えられるかどうか、どうなることやら。
(田村)

12月30日 雪

5:00 起床、6:50 出発。昨日の雨に濡れた装備で稜線の風にあたるのは心配だったが、思いのほか暖かく、しんしんと雪が降る他は風もほとんどない。小原峠までの一登りは、寝ぼけ気味の私の地図読みで遠回りに左側から回り込み、わずかに頭を覗かせている峠の看板からまっすぐ尾根沿いに南へ。8:30 稜線にでて大舟からの



尾根と合流、8:50 赤兎山のなだらかな山頂に到る。ようやくスタート地点にたつたと感じる。

9:10 赤兎避難小屋は、まだ雪に埋もれずにそこにあった。嬉々としてひと時憩う。雪や風から解放されて、『ほう〜』と息をはく。光の差し込む明るい小屋だ。修繕した真新しい梁と古い梁のコントラストが小屋を独特に彩る。大事にされている温かみを感じる。名残惜しいが、あつという間に出発のときは迫り、9:30 片付けて出発。

小屋の先の下りは傾斜がありクラストしていた。スノーシューでは滑るの

でつぼ足で降りる。その後は再びスノーシューを装着し、快適に距離を伸ばす。概ね膝までのラッセルが続く。

今回4人全員が新たに購入したおそろいのスノーシュー(MSRのライトニングアッセント)は、急傾斜では少々もどかしいが、重い深雪のラッセルでは強力な味方になってくれた。特に女性版は、ただサイズを小さくしたのではなく、足幅やラインがきちんと検証されたうえで作られている為か、他のスノーシューと較べて抜群に歩きやすかった。そしてデザインがなかなか素晴らしい。個人的にはGOODデザイン賞 of THE YEAR をあげたいくらい。チューブではなくクランポン型に改良された足型の流線は無駄がなくシンプルで美しく、他のごつごつしたスノーシューとは見た目の斬新さで一線を画している。

ラッセルに疲れてくると自然と視線が下がってくるのだが、そこに、雪をパッと散らしながら前へ進むスノーシューが目飛び込んでくると、『この絶妙なラインはどうやって計算したんだろう。』『この赤い縁取りがまた利いているなあ』等々、見とれてあきることがない。ワカンの小回りのきく柔軟さシンプルさ軽さは捨てがたいけれど、スノーシューには、まだ進化を続けている道具としての可能性があって面白いと思った。

ちょっと脱線してしまったが、ありがたくも最強のスノーシューのおかげで順調に本日の宿泊予定ポイント1296mを通過した。時刻はまだ11:50。しかし雪はずっと降り続けているので、段々ラッセルも深くなっていく。ふかふかの軽雪が徐々に重く足に絡まってくる。15時過ぎ、先ほどの倍ぐらの時間をかけて杉峠に到る。立派な杉の木立が幾本も並び、重たい雪のショールをはおって、森のたたずまいを優しくなごませていた。風のこない南側の平地にテントを設営。しんしんと雪は寡黙に積もっていく。夜にそなえ、掘を80cmほど掘る。大野さん特製の栄養満点ペミカンカレーを頂き、予報を聞く。天気図はほとんど動いていない。ラジオは、明日も

寒気が流入し、大雪警報・雪崩に注意と告げていた。明日に核心を控え、緊張してシュラフに入る。20:00 就寝。(山川)

12月31日 雪

夜は雪が80cmくらい降り、テントも半分埋まったが、昨日念入りに周囲を掘った成果か除雪はせずに済んだ。

この雪でようやく豪雪地帯に来ているという実感が湧いてくる。ただ、寒気が入って本格的な吹雪になると予測していた割に、風雪・視界はそれほど悪くはならない。何故に？

今日は最初から空荷ラッセル。とはいえ深くて腹まで、大体腿程度で済んでいるのは、スノーシューの力か。しんしんと雪が降る中を黙々と歩く。「お疲れ様」と声をかけて先頭を替わり、汗が滴る頃「よろしく」と言って脇により、ザックを取りに戻る。一休みして先頭に追いつく頃、次のトップがザックを取りに戻るのとすれ違い、三番目につく。延々続く繰り返しの中、無我の境地に達する。そんな時間がとても好きだ。昨日と比べると格段に落ちるが、皆が協力して、それなりのペースで進んでいく。

夏道が分岐する所は風の通り道か雪も少なく、標識が出ている。六本檜と呼ばれるこの付近だけには檜が何本か立っている。テン場予定の1481には昼に到着したが、先に樹林も見えるので行ける所まで進むことにする。1481付近の東側は白い雪堤となっているが、当たりを付けて適当に登ると、雪庇もなく釣り尾根を右下に見下ろす尾根上に出た。

1500mを越える辺りから次第に風が強まり、尾



根上の木々も背が低く

なってきた。風が強まるなかあまり先に進んでも仕方がないので、山川SLの許しを得て1520m付近で南側にテン場を定め、早めにC3。

軽量化しているわりに豊富なつまみを次々に口にしつつ時間を過ごす。夕食に山川シェフ特製の豚汁を食べると腹は満腹。締め年越し蕎麦は、2時間程おいて、寝る前に頂いた。明日も強い冬型が続く予報となっているが、核心部を越えられるであろうか。不安を抱きつつ濡れたシュラフに入り、大晦日の眠りに落ちた。(大野)

1月1日 雪

冬型は一段と強まったようだが、昨日ほど雪は積もっていなかった。風雪を完全に避けられ



る場所に泊まったため、比較的穏やかに年を越すことが出来た。朝食は大野さんが用意してくれた雑煮を頂き、一時正月気分になる。

7:10、出発。ザックを背負ったままでもなんとか進めた。視界は良好とはいえないが、意外と空は明るく、進む方向がかるうじて見えて、行動に支障はない。尾根の右側に張り出した雪庇を避けながら、しばらくは左側斜面の樹林帯にルートを取りながら進む。所々深雪になったので、空身ラッセルを交えながら登る。1671mの剣ヶ岩を過ぎると、風雪が強くなってきた。ここからは斜度が急激に上がり、所々雪が固くなってきたので、スノーシューを外してアイゼンを着けた。急登が終わると一旦傾斜が緩み、再び深雪となったので、またスノーシューに履き替える。

風雪は一段と強まり、視界もきかなくなってきた。灌木がほとんどなくなり、雪央のラインの見分けがつかなくなったので、このまま進むのは危険と判断、少し戻った岩陰でツェルトを被って待機する。やがて一瞬空が明るくなったので、リーダーの田村さんが、目印の赤布を雪面に立ててくれた。それを目印に再び進む。

視界は少しはよくなってきたようだが、風雪は強くなる一方である。三ノ峰の稜線直下の急登で雪がクラストしてきたので、再びアイゼンに履き替えた。カリカリの斜面をアイゼンをきかせながら登ると、指導標のある主稜線に出た。ここまで来ると体が飛ばされそうになるくらいの風雪となった。

さらに少し北に進むと、三ノ峰避難小屋が見えた。13:15、避難小屋に到着。とりあえずほっとする。小屋の入口は雪に埋まっていたので、すぐ除雪作業にかかる。約45分で雪を掘り起こし、小屋の中に入ることが出来た。外は荒天だが、中は極楽！このような時は避難小屋のありがたみが身に沁みて感じられる。

小屋に入り荷物を置くと、山川さんが「指が凍っている」と叫んだ。最初は何のことか分からなかったが、どうやら凍傷にやられたらしい。皆に動揺が広がったが、本人はいたって冷静だ。幸いもう小屋の中なので、さっそくテントの中で患部をぬるま湯につけて温め続けた。右中指の先をやられたようだが、重傷ではなさそうなので、しばらくすると冗談も飛び交い、和やかな雰囲気になった。



本人の話によると、オーバーミトンに雪が入ったのに気付かなかったのが原因らしい。確かに高度が上がってからは体感温度が急激に下がったので、私も気をつけながら登っていたが、皆で声をかけ合い注意を喚起すべきだったかもしれない。条件が悪いと、この程度の標高でも簡単に凍傷になることを改めて思い知らされた。

その夜は一晚中風雪が収まらなかった。停滞の可能性も含めた明日の行動に思いを馳せながら、シュラフに入った。(浅井)

1月2日 吹雪のち曇り

朝起きると、小屋の入口は完全に埋まっていた。掘って外に出るが、吹雪いて視界が20mくらいか。時間待ちとする。9時の天気図を取った後、山頂方面が少し見えるようになってきたので、ピークに向かう。10:30 三ノ峰。ほんの少しの距離なの

に、帰りは小屋が見えなくなり、慎重に戻る。二ノ峰方面に下るにはまだ厳しいと判断し、もう一度小屋で待機。私が何度か様子を見に出ると、少し視界が利くようになってきた。下り口まで赤布を何本か打ち、11:30 出発。尾根が途中で不明瞭になり、多少逡巡する。しかし、このあたりから次第に回復傾向がはっきり出てきて、視界も問題なくなった。ようやく真っ白な雪尾根を見ることができ、感嘆の声が上がる。ガスの切れ間に見える銚子ヶ峰はとても美しい。これを過ぎ標高が下がるにつれて、雪がだんだん重くなってきて、ラッセルがづらくなってきたが、みんな神鳩の避難小屋に泊まりたい一心で頑張る。16 時、避難小屋着。きれいで気持ちいい小屋だ。入口を少し掘って入る。



ここまで来られてほっと一息つく一方で、ここからどうするかが問題だった。みんなの意見を聞き、悩みながら床に入る。(田村)

1月3日 曇りのち晴れ時々雪

石徹白に下りるか大日方面へ抜けるか、昨晚はとうとう結論がでなかった。あえて南下ラインにこだわろうという雰囲気はないが、かといって石徹白におりる理由にも弱い。浅井さんは凍傷のことを気遣って、下りようといってくださいましたが、中指先端が少し凍った程度なので行動に支障はなく、これだけ時間がたっているの



ので今更 1 日くらいは関係なさそうでもあり、凍傷を理由に下山するのは納得がいかない気持ちだった。

朝ご飯を食べながら、石徹白へ下山という決断をきく。我ながら凍傷になったことが許せなかったが、下山の方針をきいた瞬間は、きっかけを作った自分への怒りと情けなさで目がくらみそうだった。しばらくもくもくとラッセルする。

今日は、穏やかな晴天に恵まれ、粉雪がちりちりと舞って輝いている。林の向こうを走り抜けていく兎の背中がみえる。ちちち、と鳥が鳴く。雪煙がたなびいて、さわさわと微風が通り抜けていく。こんなに素晴らしい自然の中なのに、楽しまないのはもったいない。いつのまにか静かな気持ちになっていた。

今日は、穏やかな晴天に恵まれ、粉雪

10:00 林道へでる。林道歩きは長く単調だが、右手に流れる石徹白川の黒曜石のような水面とオブジェのような雪像の対比は見飽きることがない。角を曲がるたび、雪の色が変わっていく。雪のグレーには無限にパターンがあって、時々はっとするほど綺麗な発色をしていた。20 分くらいごとにラッセルを交代しながら、雪を眺め、今年の山の計画などをつらつら考えるうちにいつしか白山中居神社についていた。13:50。

荷物を置いて、神社に詣でる。家族の健康と山の無事故を祈り、今年の抱負を報告する。立派なご神木が幾本も聳えたち、神さびたお社だった。



しかしここからが長かった。こうして降りてきたからには、早く東京へ帰って、いろいろしたいことがある。しかし三が日ということもありバスは運休、タクシーは大雪のため麓から上がってきてくれない。民宿もこの先まで行かないとないという。とりあえず 1km ほど先のスキー場まで歩き、情報を仕入れる。北濃か美濃白鳥まで 2-3 時間くらい歩けば、タクシーや電車もあるので、うまくいけば今日中に東京へ帰ることも不可能ではない。でもせっかく山へきてせかせかと帰るのもも

ったくない、地元の民宿に泊まって帰ろう、という方針となり、宿を探す。結局再び降り始めた雪の中を歩くのもなんだということで、スキー場の前の『旅館いとしろ』に泊まることになった。名前は旅館だが、アットホームな民宿だった。乾燥室で全装備を干し（これは本当にありがたかったです。）、交代でお風呂に入り、夕飯はすき焼きをお腹いっぱい頂いた。夕飯後は、7 畳のこじんまりした部屋でこたつに入りくつろいだ。今日はエンドレス宴会になるかと覚悟したが、10 分もすると皆うとうとして、まもなく就寝となった。

21 時過ぎに消灯してもなんだか眠れず、廊下の椅子に座って本を読んでいると、窓の外の黒々した闇の中でしんしんと雪の舞う気配が伝わってくる。下の階では、宴会らしいどやどやっという笑い声がして、『お正月合宿は終わったんだな』という実感が急に沸いてきた。この山行は終わったけれど、まだはじまったばかりだ。沢山学ぶこともある。沢山の課題がある。そして登りたい山がある。早く帰って計画をたてようと思った。

翌日はバスで美濃白鳥にでると、地酒の一升瓶（とミルクティー）をお供に観光気分ですら車窓の旅を楽しみ、特急と新幹線を乗り継ぎ帰京した。（山川）

【感想】

山川：白山は昔、八方塞りに感じていた私の山に、転機をもたらしてくれた思い出のある山だ。山がどれだけ自由に存在し、そこにあるか、山の無限の可能性を初めて知った。冬の白山は重たい湿雪がまとわりつくようにひたすら降り続け、山深いので人の気配はほとんどない。でも時々ふっと優しい表情をみせて、なだらかな山稜が不思議な密度で迫ってくる。この空間に思う存分身を浸したい、という願いが、9 日間にわたるお正月休みを得てようやくかなった。

今回の山行は、プレの最初から本山行の最後まで『ワンダーフォーゲル部冬合宿』のような雰囲気だった。自分に足りないものを知り、判断の根拠を身をもって学び、最初から最後までただひたすらラッセルの、有意義な 6 日間だった。田村さんや大野さんの微妙なルート取りや地図読みから、どれだけ自分の地図読みが大雑把で慎重さに欠けていたかを思い知った。また、リーダーの気遣いや気苦労を目の当たりにし、パーティを組むことの意味を考えた。浅井さんの一言が、ぴりぴりした緊張感を魔法のようにほぐし、ユーモラスな柔らかさをもたらすのを、不思議な思いで眺めた。大野さんの冷静な判断・行動の早さに、目指すもの必要なものを改めて認識した。

山行そのものは、天候もラッセルも覚悟したような厳しさではなく、非常に恵まれた条件の中で三ノ峰を越えられたことは幸いだった。前半は毎日濡れた（凍った）シュラ

フで、それだけがなんともいえず悲しかったが、静寂の森でのラッセル三昧、軽量化といいながらやはりでてくる食料を食べ続け、多めに持ってきた燃料をぜいたくに使い、雪の降る音に耳をすまし、あっという間の6日間だった。



大野：白山といえば学生時代の二回の夏合宿。炎天下の灌木に果て狂った1年のショウガ山稜線。台風や下級生の体調に苦労した4年、笹の願教寺稜線。十年以上前にヤブと格闘した山々を厳冬期に再訪する。心そそられる計画。不安も大きかった。越後の山に何度か入り多少の経験は積んだが、新たな山域、比較的斬新なメンバー、厳しい気象と山深さ、更に最悪の天気予報。ということで、今回は結構ピリピリしていた（のですよ！）。

終わってみれば、予想したほど天気も悪くならず、ドカ雪もなかった。雨、濡れテント、ラッセル、風雪。決して甘くはなかったが、6日間白山の懐に抱かれ、静かな山旅を満喫できた。自分も久しぶりに真面目にルーファイをし、地図読み技術と耐寒力の低下を痛感しつつも、冬山に登る手応えのようなものを思い出した。

ストイックな冬山はもう終わりかな・・・と思ったりもしていたのであるが、もう少し極めてみるのも悪くないかなあ・・・

浅井：12月の頭にお誘いを受けた。まず日程の長さには怯んだが、プレ山行に参加するうちに、お二人の白山にかける情熱に感化され、しだいに参加の方向に心が動いていった。幸い久しぶりにまとまった休みがとれるし、山行内容もその長さを除けば私の志向にも合っていた。ちゃんと歩けるかという不安はあったが、せっかくの機会なので頑張ってみる気になったのである。

準備段階では、とにかく軽量化を第一に考え、多くの装備をより軽量で使いやすいものに買い換えた。かなりの出費だったが、それだけの価値は十分あったと思う。

今回は気象条件が最悪だったが、標高が低いせいか、またスノーシューの威力もあり、行動に大きな支障はなかった。三ノ峰への登りはホワイトアウト状態でさすがに厳しかったが、無事避難小屋に入れた時は本当にほっとした。翌五日目は午後からこれまでの荒天が嘘のように青空が広がり、荒天直後の雪山の美しさを心ゆくまで堪能することが出来た。このすばらしい景色を見られただけでも来たかいがあったと言えるべきであろう。六日目は諸々の事情で石徹白下山となったが、ここまで荒天を押してのハードな行程が続いていたので、もうこれで充分という晴れやかな気持ちで山を下りた。



このように悪条件にもかかわらず、計画の八割方も達成できたのは、やはり田村さん・山川さんの絶大な情熱が終始パーティを引っ張ったからだと思う。ダレることなく、張りつめた緊張感の中で過ごした。またルートファインディングは、田村さん・



大野さんの読図力の確かさに負うところが大きかった。私ももっと読図力を高める必要があることを痛感させられた。

厳冬期の5泊という私にとっては初体験となる長期山行を終えて、今は充実感で一杯である。六日間全く人に会わずに我々だけの静かな山を満喫することが出来た。田村・山川両氏に洗脳されたわけでは決してないが(笑)、機会があればまた季節を問わず、白山を訪れてみたいと思う。

田村：厳しくも充実した6日間を過ごすことができ、メンバーには本当に感謝しています。ただ最後の判断は、不満があったかもしれず、その点はお詫びします。天気も回復し、日程も十分だし、個人的には私もとっても行きたかったのですが、万が一にも凍傷が悪化してはいけないと思い、時間的にほとんど同じかもしれないが、少しでもリスクの少ない選択をすべきと判断しました。

白山シリーズ、今後も少しずつですが積み重ねていきたいと思っています。

【行程】

- 12/29 勝山9:35＝小原9:55－小原峠手前15:40 C1
- 12/30 C1 6:50－赤兎山 8:50－赤兎避難小屋 9:10－1296m11:50
－杉峠先のコル 15:50 C2
- 12/31 C2 7:10－六本檜11:10－1481m12:10－1550m付近13:10 C3
- 1/1 C3 7:00－剣ヶ岩8:45－三ノ峰避難小屋13:15 C4
- 1/2 C4 10:10－三の峰－小屋 11:30－二ノ峰 13:10－銚子ヶ峰 15:05
－神鳩ノ宮避難小屋 16:00 C5
- 1/3 C5 7:00－林道 10:00－白山中居神社 13:50

【地図】北谷、越前勝山、願教寺山、二ノ峰、石徹白

